星あかり

泉鏡花

もとより何故（なにゆえ）という理（わけ）はないので、墓石の倒れたのを引摺寄（ひきずりよ）せて、二ツばかり重ねて台にした。

その上に乗って、雨戸（あまど）の引合（ひきあわ）せの上の方を、ガタガタ動かして見たが、開（あ）きそうにもない。雨戸の中（うち）は、相州西鎌倉乱橋（みだればし）の妙長寺（みょうちょうじ）という、法華（ほっけ）宗の寺の、本堂に隣（とな）った八畳の、横に長い置床（おきどこ）の附いた座敷で、向って左手（ゆんで）に、葛籠（つづら）、革鞄（かばん）などを置いた際（きわ）に、山科（やましな）という医学生が、四六（しろく）の借蚊帳（かりかや）を釣って寝て居るのである。

声を懸けて、戸（と）を敲（たた）いて、開けておくれと言えば、何の造作（ぞうさ）はないのだけれども、止（よ）せ、と留（と）めるのを肯（き）かないで、墓原（はかはら）を夜中に徘徊（はいかい）するのは好心持（いいこころもち）のもの

だと、二ツ三ツ言争（いいあらそ）って出（で）た、いまのさき、内（うち）で心張棒（しんばりぼう）を構えたのは、自分を閉出（しめだ）したのだと思うから、我慢にも恃（たの）むまい。……

　冷（つめた）い石塔（せきとう）に手を載せたり、湿臭（しめりくさ）い塔婆（とうば）を摑（つか）んだり、花筒（はなづつ）の腐水（くされみず）に星の映るのを覗（のぞ）いたり、漫歩（そぞろあるき）をして居たが、藪（やぶ）が近く、蚊（か）が酷（ひど）いから、座敷の蚊帳が懐しくなって、内へ入ろうと思ったので、戸を開けようとすると閉出されたことに気がついた。

　それから墓石に乗って推（お）して見たが、原（もと）より然（そ）うすれば開（あ）くであろうという望（のぞみ）があったのではなく、唯（ただ）居（い）るよりもと、徒（いたず）らに試みたばかりなのであった。

何(なん)にもならないで、ばたりと力なく墓石から下りて、腕を拱(こまぬ)き、差俯向(さしうつむ)いて、じっとして立って居ると、しっきりなしに蚊が集(たか)る。毒虫が苦しいから、もっと樹立(こだち)の少い、広々とした、うるさくない処をと、寺の境内(けいだい)に気がついたから、歩き出して、卵塔場(らんとうば)の開戸(ひらきど)から出て、本堂の前に行った。

然(さ)まで大きくもない寺で、和尚と婆(ばあ)さんと二人で住む。門まで僅(わず)か三四間(けん)、左手(ゆんで)は祠(ほこら)の前を一坪ばかり花壇にして、松葉牡丹(まつばぼたん)、鬼百合(おにゆり)、夏菊(なつぎく)など雑植(まぜうえ)の繁った中に、向日葵(ひまわり)の花は高く蓮(はす)の葉の如(ごと)く押被(おっかぶ)さって、何時(いつ)の間(ま)にか星は隠れた。鼠色(ねずみいろ)の空はどんよりとし

て、流るる雲も何(なん)にもない。なかなか気が晴々(せいせい)しないから、一層(いっそ)海端(うみばた)へ行って見ようと思って、さて、ぶらぶら。

門の左側に、井戸が一個(ひとつ)。飲水(のみみず)ではないので、極(きわ)めて塩ツ辛いが、底は浅い、屈(かが)んでざぶざぶ、さるぼうで汲(く)み得(え)らるる。石畳(いしだたみ)で穿下(ほりおろ)した合目(あわせめ)には、このあたりに産する何とかいう蟹(かに)、甲良(こうら)が黄色で、足の赤い、小さなのが数限(かずかぎり)なく群(むらが)って動いて居る。毎朝この水で顔を洗う、一杯頭から浴びようとしたけれども、あんな蟹は、夜中に何をするか分らぬと思ってやめた。

門を出ると、右左、二畝(ふたうね)ばかり慰みに植えた青田(あおた)が

あって、向う正面の畦中（あぜなか）に、琴弾松（ことひきまつ）というのがある。一昨日（おとつい）の晩宵（ばんよい）の口に、その松のうらおもてに、ちらちら灯（ともしび）が見（み）えたのを、海浜（かいひん）の別荘で花火を焚（た）くのだといい、否（いや）、狐火（きつねび）だともいった。その時（とき）は濡（ぬ）れたような真黒な暗夜（やみよ）だったから、その灯（ひ）で松の葉もすらすらと透通（すきとお）るように青く見えたが、今（いま）は、恰（あたか）も曇った一面の銀泥（ぎんでい）に描いた墨絵のようだと、熟（じっ）と見ながら、敷石（しきいし）を蹈（ふ）んだが、カラリカラリと日和下駄（ひよりげた）の音の冴（さ）えるのが耳に入って、フと立留（たちとま）った。

　門外（おもて）の道は、弓形（ゆみなり）に一条（ひとすじ）、ほのぼのと白く、比企（ひき）ケ谷（やつ）の山（やま）から由井（ゆい）ケ浜（はま）の磯際（いそぎわ）まで、斜（ななめ）に鵲（かささぎ）の橋を渡

したよう也(なり)。

ハヤ浪の音が聞えて来た。

浜の方へ五六間進むと、土橋が一架(ひとつ)、並の小さなのだけれども、滑川(なめりがわ)に架(かか)ったのだの、長谷(はせ)の行合橋(ゆきあいばし)だのと、おなじ名に聞えた乱橋(みだればし)というのである。

この上で又(ま)た立停(たちとま)って前途(ゆくて)を見ながら、由井ヶ浜までは、未(ま)だ三町ばかりあると、つくづく然(そ)う考(かんが)えた。三町は蓋(けだ)し遠い道ではないが、身体(からだ)も精神も共に太(いた)く疲れて居たからで。

しかしそのまま素直(まっすぐ)に立ってるのが、余り辛(つら)かったから又た歩いた。

路（みち）の両側しばらくのあいだ、人家（じんか）が断（た）えては続いたが、いずれも寝静まって、白（しら）けた藁屋（わらや）の中に、何家（どこ）も何家（どこ）も人の気勢（けはい）がせぬ。

その寂寞（せきばく）を破（やぶ）る、跫音（あしおと）が高いので、夜更（よふけ）に里人（さとびと）の懐疑（うたがい）を受けはしないかという懸念から、誰（たれ）も咎（とが）めはせぬのに、抜足（ぬきあし）、差足（さしあし）、音は立てまいと思うほど、なお下駄（げた）の響（ひびき）が胸を打って、耳を貫（つらぬ）く。

何（なに）か、自分は世の中の一切（すべて）のものに、現在（いま）、恁（か）く、悄然（しょんぼり）、夜露（よつゆ）で重（おも）ッくるしい、白地（しろじ）の浴衣（ゆかた）の、しおたれた、細い姿で、首（こうべ）を垂れて、唯一人、由井ケ浜へ通ずる砂道を辿（たど）ることを、見（み）られてはならぬ、知られては

ならぬ、気取(けど)られてはならぬというような思(おもい)であるのに、まあ！　廂(ひさし)も、屋根も、居酒屋の軒(のき)にかかった杉の葉も、百姓屋の土間(どま)に据(す)えてある粉挽臼(こなひきうす)も、皆目を以て、じろじろ睨(ね)めるようで、身(み)の置処(おきどころ)ないまでに、右から、左から、路(みち)をせばめられて、しめつけられて、小さく、堅くなって、おどおどして、その癖、駆(か)け出そうとする勇気はなく、凡(およ)そ人間の歩行に、ありッたけの遅さで、汗になりながら、人家のある処(ところ)をすり抜けて、ようよう石地蔵の立つ処。

　ほッと息をすると、びょうびょうと、頻(しきり)に犬の吠(ほ)えるのが聞えた。

一つでない、二つでもない。三頭(みつ)も四頭(よつ)も一斉に吠
え立てるのは、丁(ちょう)ど前途(ゆくて)の浜際(はまぎわ)に、また人家が七八軒、
浴場、荒物屋(あらものや)など一廓(ひとくるわ)になって居(い)るそのあたり。
彼処(あすこ)を通抜(とおりぬ)けねばならないと思うと、今度は寒気(さむけ)がし
た。我ながら、自分を怪(あや)しむほどであるから、恐ろしく
犬を憚(はばか)ったものである。進まれもせず、引返(ひきかえ)せば再
び石臼(いしうす)だの、松の葉だの、屋根にも廂(ひさし)にも睨(にら)まれる、
あの、この上(うえ)もない厭(いや)な思(おもい)をしなければならぬの歟(か)と、
それもならず。静(じっ)と立ってると、天窓(あたま)がふらふら、お
しつけられるような、しめつけられるような、犇々(ひしひし)と
重いものでおされるような、切(せつ)ない、堪(たま)らない気がし

て、もはや！　横に倒れようかと思った。

処へ、荷車が一台、前方（むこう）から押寄せるが如くに動いて、来たのは頬被（ほおかぶり）をした百姓である。

これに夢が覚めたようになって、少し元気がつく。曳（ひ）いて来たは空車（からぐるま）で、青菜（あおな）も、藁（わら）も乗って居はしなかったが、何故（なぜ）か、雪の下の朝市に行くのであろうと見て取ったので、なるほど、星の消えたのも、空が淀（よど）んで居るのも、夜明に間（ま）のない所為（せい）であろう。墓原（はかはら）へ出たのは十二時過（すぎ）、それから、ああして、ああして、と此処（ここ）まで来（き）た間（あいだ）のことを心に繰返して、大分（だいぶん）の時間が経（た）ったから。

と思う内に、車は自分の前、ものの二三間(げん)隔たる処から、左の山道(やまみち)の方へ曲った。雪の下へ行くには、来て、自分と摺(す)れ違って後方(うしろ)へ通り抜けねばならないのに、と怪(あやし)みながら見ると、ぼやけた色で、夜の色よりも少し白く見えた、車も、人も、山道(やまみち)の半(なかば)あたりでツイ目のさきにあるような、大きな、鮮(あざやか)な形で、ありのまま衝(つ)と消えた。

今は最(も)う、さっきから荷車が唯(ただ)辷(すべ)ってあるいて、少しも轣轆(れきろく)の音の聞えなかったことも念頭に置かないで、早くこの懊悩(おうのう)を洗い流そうと、一直線に、夜明に間もないと考えたから、人憚(ひとはばか)らず足早(あしばや)に進んだ。荒物屋(あらものや)

の軒下（のきした）の薄暗（うすくら）い処に、斑犬（ぶちいぬ）が一頭、うしろ向（むき）に、長く伸びて寝て居たばかり、事なく着いたのは由井ヶ浜である。

　碧水金砂（へきすいきんさ）、昼の趣（おもむき）とは違って、霊山（りょうぜん）ヶ崎（さき）の突端（とっぱな）と小坪（こつぼ）の浜でおしまわした遠浅（とおあさ）は、暗黒の色を帯び、伊豆の七島も見ゆるという蒼海原（あおうなばら）は、ささ濁（にごり）に濁（にご）って、果（はて）なくおっかぶさったように堆（うずだか）い水面は、おなじ色に空に連（つらな）って居る。浪打際（なみうちぎわ）は綿（わた）をば束（つか）ねたような白い波、波頭（なみがしら）に泡（あわ）を立てて、どうと寄（よ）せては、ざっと、おうように、重々（おもおも）しゅう、飜（ひるがえ）ると、ひたひたと押寄せるが如くに来る。これは、一秒に砂一粒（りゅう）、幾億万年

の後(のち)には、この大陸を浸(ひた)し尽そうとする処の水で、いまも、瞬間の後(のち)も、咄嗟(とっさ)のさきも、正(まさ)に然(しか)なすべく働いて居るのであるが、自分は余り大陸の一端が浪のために喰欠(くいか)かれることの疾(はや)いのを、心細く感ずるばかりであった。

　妙長寺に寄宿してから三十日ばかりになるが、先に来た時分とは浜が著(いちじる)しく縮まって居る。町を離れてから浪打際(なみうちぎわ)まで、凡(およ)そ二百歩もあった筈なのが、白砂(しらすな)に足を踏掛(ふみか)けたと思うと、早(はや)や爪先(つまさき)が冷(つめた)く浪のさきに触れたので、昼間は鉄の鍋(なべ)で煮上げたような砂が、皆ずぶずぶに濡(ぬ)れて、冷(ひやっ)こく、宛然(さながら)網の下を、水が潜(くぐ)っ

て寄せ来るよう、砂地に立ってても身体（からだ）が揺（ゆら）ぎそうに思われて、不安心でならぬから、浪が襲うとすたすたと後（あと）へ退（の）き、浪が返るとすたすたと前へ進んで、砂の上に唯一人やがて星一つない下に、果のない蒼海（あおうみ）の浪に、あわれ果敢（はかな）い、弱い、力のない、身体単個（ひとつ） 弄（もてあそ）ばれて、刎返（はねかえ）されて居るのだ、と心着（こころづ）いて悚然（ぞっ）とした。

　時に大浪が、一（ひと）あて推寄（おしよ）せたのに足を打たれて、気も上（うわ）ずって蹌踉（よろ）けかかった。手が、砂地に引上（ひきあ）げてある難破船の、纔（わず）かにその形を留（とど）めて居る、三十石積（こくづみ）と見覚えのある、その 舷（ふなばた） にかかって、五寸釘をヒヤヒヤと摑（つか）んで、また身震（みぶるい）をした。下駄はさっきから砂地

を駆(か)ける内に、いつの間にか脱いでしまって、跣足(はだし)で
ある。
何故(なぜ)かは知らぬが、この船にでも乗って助かろうと、片手を舷に添えて、あわただしく擦上(すりあが)ろうとする、足が砂を離れて空(くう)にかかり、胸が前屈(まえかが)みになって、がっくり俯向(うつむ)いた目に、船底に銀のような水が溜(たま)って居るのを見た。
思わずあッといって失望した時、轟々轟(ごうごうごう)という波の音。山を覆(くつがえ)したように大畝(おおうねり)が来たとばかりで、――跣足(はだし)で一文字(いちもんじ)に引返(ひきかえ)したが、吐息(といき)もならず――寺の門を入ると、其処(そこ)まで隙間(すきま)もなく追縋(おいすが)った、灰汁(あく)を覆(かえ)

したような海は、自分の背（せなか）から放れて去（い）った。

引き息で飛着（とびつ）いた、本堂の戸を、力まかせにがたひしと開ける、屋根の上で、ガラガラという響（ひびき）、瓦（かわら）が残らず飛上（とびあが）って、舞立（まいた）って、乱合（みだれあ）って、打破（うちやぶ）れた音がしたので、はッと思うと、目が眩（くら）んで、耳が聞えなくなった。が、うッかりした、疲（つか）れ果（は）てた、倒（たお）れそうな自分の体は、……夢中で、色の褪（あ）せた、天井の低い、皺（しわ）だらけな蚊帳（かや）の片隅（かたすみ）を掴（つか）んで、暗くなった灯（ひ）の影に、透（す）かして蚊帳の裡（うち）を覗（のぞ）いた。

医学生は肌脱（はだぬぎ）で、うつむけに寝て、踏返（ふみかえ）した夜具（やぐ）の上へ、両足を投懸（なげか）けて眠って居る。

ト枕を並べ、仰向(あおむけ)になり、胸の上に片手を力なく、片手を投出し、足をのばして、口を結んだ顔は、灯の片影(かたかげ)になって、一人すやすやと寝て居るのを、……一目見ると、それは自分であったので、天窓(あたま)から氷を浴びたように筋(すじ)がしまった。

ひたと冷(つめた)い汗になって、眼を睜(みひら)き、殺されるのであろうと思いながら、すかして蚊帳の外を見たが、墓原をさまよって、乱橋から由井ケ浜をうろついて死にそうになって帰って来た自分の姿は、立って、蚊帳に縋(すが)っては居なかった。

もののけはいを、夜毎(よごと)の心持(こころもち)で考えると、まだ三時

には間(ま)があったので、最(も)う最うあたまがおもいから、そのまま黙って、母上の御名(おんな)を念じた。——人は恁(こ)ういうことから気が違うのであろう。

底本：「書物の王国11　分身」国書刊行会
1999（平成11）年1月22日初版第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第四巻」岩波書店
1941（昭和16）年3月15日第1刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：土屋隆
校正：門田裕志
2006年3月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。